

第 23 回秩父宮記念スポーツ医・科学賞 奨励賞

「マスタース甲子園」開催を通じた生涯スポーツ推進プロジェクト研究グループ
(代表：長ヶ原 誠 氏)

本グループは、2004 年から全国の高校野球 OB/OG が、性別・世代・甲子園出場の有無・元プロアマ問わず、出身校別に同窓会チームを結成し、甲子園出場を目指す「マスタース甲子園」の開催を通じて生涯スポーツの推進に係る研究を実践するグループである。

マスタース甲子園は、2004 年に第 1 回大会を開催し、そこから 2019 年まで毎年開催している(2020 年は新型コロナウイルス感染症拡大により中止)。かつて甲子園出場を夢見た高校球児(男女問わず)が、同窓会チームを結成し、地方予選会を勝ち抜き甲子園の出場を目指すものである。出場者は下が 19 歳から上は 80 歳を超える幅広い世代であり、1 チームの登録者は 50 名、3 回までは 34 歳以下のチームで行い、4 回以降は 35 歳以上で行う等、マスタース甲子園ならではの独自ルールが設定されている。第 1 回大会は各地区の予選会参加校が 4 県 82 校であったが、第 16 回大会では 41 都道府県 677 校の参加となるなど、年々規模を拡大している。「OB/OG 野球クラブの活性化、生涯スポーツとしての野球文化の発展、マスタース世代とともに高校球児を含めたユース世代にも応援メッセージを発信しながら、活力と夢に満ちた個人・地域・社会・未来への創造と発展に寄与していくこと」を目指し、特に現役時代には甲子園出場を果たせなかった高校球児を対象に各地域での予選大会の開催や、全国高校野球 OB クラブ連合の設立による同窓会組織の発足を通じて地域とスポーツを巻き込んだイベントとなっている。

野球限定の取組ではあるものの、単に選手たちが甲子園に出場すること、または主催者が大会の開催だけを目的とするイベントではなく、「個人のライフスタイルの活性化」「生涯スポーツ文化の振興」「世代間を通じた地域再生」「スポーツを通じた文化の継承」等、スポーツだけでなく現代社会の諸課題にも対応した、社会貢献度の高いユニークな取組である。このイベントを通じて、日本におけるマスターススポーツ論を基にしたスポーツプロモーション研究を展開している。また、マスタース甲子園開催の継続に伴うアクションリサーチによって、個人、地域、社会、未来の活性化の各達成度と、具体的な活性化の内容の把握、さらには、それらを生み出した過程について、都道府県支部、同窓会チーム、参加者自身、そして、ボランティア、協賛企業・支援団体の支える側の視点からの効果についてもプロセス評価と便益研究を進め、これまで International Journal of Sport and Health Science 等での研究誌掲載や書籍発行、国内外での関連学会・シンポジウム発表を通じて継続的に成果を生み出している。さらには、これらの研究成果を 2016 年

に設立された神戸大学アクティブエイジング研究センターの設立と結び付け、国際的にも極めてユニークな日本における同窓会型中高年者スポーツイベントの実践とアクティブエイジング研究の理論的成果を、生涯スポーツ振興の科学的知見として積み上げ、他のマスタースポーツ全国大会の発足や国際的大会の支援においても研究プロジェクトを展開している。このような、実践と研究成果は多くのメディアでも取り上げられ、社会的な注目度も高くなっている。

本グループの代表者である、神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授の長ヶ原誠氏は、生涯スポーツ振興論、レジャー・スポーツ老年学を研究分野としており、とりわけ成人・中高齢者を対象とした健康増進やスポーツ振興をテーマとして研究を行っている。神戸大学大学院の社会・地域貢献活動の一つとして、学部内の研究室に設置されたマスタースポーツ振興支援室の大会事務局にてマスタース甲子園と共に、本大会の主催団体となる全国高校野球 OB クラブ連合の運営を行っており、スポーツ振興や生涯教育・老年学等のテーマに関心を持つ大学生及び卒業生たちの協力によって開催が継続されている。大会の開催による地域の活性化、様々な団体の連携強化、若者たちへの地域貢献活動の機会の創造など、実際に大会に出場していない人たちにも大きな影響を与えているといえる。

以上のことから、このマスタース甲子園はいわば運動部活動を起点とした継続的なマスタース年代におけるわが国特有の「同窓会型マスタースポーツ」として、今までにない日本の生涯スポーツ推進モデルを提供しているといえ、今後の生涯スポーツの発展にさらなる貢献が期待できる。